

Title	事実の客観性と関係の客観性 : E. H. Carrの歴史哲学批判
Sub Title	Objectivity of fact and objectivity of relation : a critique on the philosophy of history of E. H. Carr.
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.2/3 (1962. 12) ,p.85(241)- 112(268)
JaLC DOI	
Abstract	<p>Prof. Carr says, "objectivity in history cannot be an objectivity of fact, but only of relation". It is correct so far as this term "relation" indicates the relation between historian and facts, but in this case we cannot find specific reason for using the term "relation." Moreover, Prof. Carr lays special emphasis on the relation between past, present and future. We do not support the theory from a logical point of view that there is an unique form of knowledge appropriated for history between past and present, much less the theory of Prof. Carr with his annexing future to past and present. He then goes astray, I suppose, out of the right path of his scientific argument. He asserts that only the future can afford the key to the past; that only the historian who has a prospective insight into the future can attain the objective understanding of the past; and that every historian, therefore, has to project his vision into the future. His is, it seems to me, a sort of intuitionism or illumination theory. And he speaks of an ultimate objectivity to which we can find ourselves approaching and in which pursuit he finds a historical progress. Doesn't this way of thinking sound somewhat idealistic ? And he makes an optimistic prediction as to a future progress of human history; "the historian of the 1920s was nearer to objective judgment than the historian of the 1880s, and the historian of today is nearer than the historian of the 1920s: the historian of the year 2000 may be nearer still". This prediction is, though convictional, not scientific. After all, Prof. Carr gives good advice for all historians to have "the sense of direction in history", "the pervading sense of a world in perpetual motion" and "the bold readiness to present fundamental challenges" to the status quo. But, by his careless introduction of some senses and attitudes into his generally accepted theories, he loses logical consistency in the course of his argument and fails in providing a well-regulated form for his discussion ; though his attitude itself, as of an "Ideolog", is rightly worthy of respect.</p>
Notes	間崎万里先生頌寿記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19621200-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19621200-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 事実の客観性と関係の客観性

—E. H. Carr の歴史哲学批判

神 山 四 郎

ここでAを一人の哲学者、Bを一人の史学者とする。この二人は前に「歴史の客観性」について一度対話をしたことがある。<sup>(1)</sup>このたびの対話はそのつづきとみればよい。二人はそれぞれ哲学者と史学者といつても、哲学と史学の立場を代弁するといふよりはむしろ哲学と史学の共通の問題を話し合おうとしている。だから二人でワグナーのいう“Philosophie der Geschichtswissenschaft”<sup>(2)</sup>をしようとする<sup>(2)</sup>と解すればよい。

**B** ロシヤ革命史や政治史の領域ですぐれた著作を出しているイギリスの歴史家 E. H. Carr が一九六一年に “What is History?” という本を書いて——これはもともとケンブリッジ大学で講演したのですが——歴史学の根本問題を新しい考え方をつかっているいろいろ分析しやさしく噛み砕いて語っているの、読んでみると大へん面白い本でした。私たちは現在諸科学の発達とりわけ歴史学に一番近接している社会科学のいちぢるしい発達を前にして今までの歴史学の常識が通じなくなっているのを感じます。半世紀前のベルンハイムが考えていたような、歴史学が経済学や心理学や民族学などたくさんの補助科学という小姓を従えて殿様然と構えていた時代は終わりました。小姓と思つていたものがりつ

ばに一人前に育つては殿様も自分の身と見くらべてみないわけにはいきません。それが科学の進歩というものです。その意味で現在は斜陽殿様が新時代にどう生きてゆくかを考える大切な時期、つまり近代歴史学の第二の啓蒙時代だと思うのですが、この本はそういう意味で私たちにいろいろ示唆を与えてくれるので大へん役にたちました<sup>3)</sup>。

しかしこの本の中でカーは歴史の客観性という問題を当然のことながらとりあげていますが、歴史の客観性とは「事実の客観性」ではなく「関係の客観性」であるといっているのです<sup>4)</sup>。われわれとしては事実の客観性を得たいしまた得られるものと思つていますが、カーが関係の客観性しか得られないというので若干戸まどいます。どうしてそうなるのかはつきりさせておかないと困りますので、私たちは前に「歴史の客観性」についてかなり話し合いましたのでその関係でもう一度この問題をとりあげて話してみたいと思つたのですがいかがでしょうか。

**A** 結構です。前の議論のときもいいましたが、歴史の客観性という問題は歴史理論の上で一番基本的なものですから一番さきに説明しておかなければならないのですが、実は一番難しい問題でそうかんたんに結論が出るようなものではないのです。しかしこの前ある程度まで分析することができましたからその上に立つて今おつしやつた事実の客観性と関係の客観性の問題を検討してみましよう。

**B** まず、この問題は誰が考えるにしてもこのように二つに分けなければいけないのでしょうか。

**A** どうして二つに分けるかということは、この事実の客観性とは何か、関係の客観性とは何か、関係というからには何と何の関係かということカーがどう考えているのかはつきりさせてからでないとなんともいえませんが、それを今確かめる前に、カーがこの二つを分けたときの分け方を見てみたい。カーは歴史においては(1)事実の客観性というものはなくて関係の客観性しかない、といっているのか、それとも、(2)事実の客観性も関係の客観性もあるが、われわ

れの認識の構造上関係の客観性の方が得やすい、といっているのか、どちらですか。つまり断定的にいっているのか相対的にいっているのかどちらでしょう。

**B** カーの言葉を見れば明らかに断定的です。“Objectivity in history cannot be an objectivity of fact, but only of relation”<sup>(5)</sup>という強い言葉で云っていますからね。

**A** それでは「事実の客観性」というのは言葉の上で仮定してみただけで実際にはないといい切っているのですね。

**B** そうです。

**A** まずそれを確かめておきたかったです。それでは次に、関係の客観性というのは何と何の関係だと云っているのですか。

**B** 「事実」(Fact)と「解釈」(interpretation)の関係です<sup>(6)</sup>。

**A** しかしカーはすでにこの本の一番最初に「歴史家と事実」というテーマを論じて、その中でもう事実と解釈の関係ははつきりさせているのではないですか。

**B** そうです。冒頭において歴史家が事実を語るということを分析して、十九世紀以来の歴史観をたどりながら、一方で史料の語るがままといったランケを教祖とする文書崇拜という偽客観主義を批判し、他方二十世紀のクローチェやベッカーやコリングウッド等の主張する歴史家が事実を創造するといった主観主義を批判して、両方を叩いた上で最後に、「歴史家は事実の卑屈な奴隷でもなく、その暴君的な主人でもない。歴史家と事実の関係は平等な関係、give and takeの関係である」といっており、「歴史家は自分の解釈に従って自分の事実をつくり上げ、自分の事実に従って自分の解釈をつくり上げる不断の作業にたずさわっている。一方を他方の上におくということは不可能である」といっている。

この interpretation と fact の両方に “his” がいついつあると “moulding” という言葉の使い方はいささか気になります。とにかく「歴史とは歴史家と事実の相互作用の不断の作業である」と結んでいきます。この結論に導くまでの議論は大へん理路整然としていて異議をさしはさむ余地はないように思います。

**A** そうしますとカーはすでに歴史家と事実を切りはなし得ないものとしてあるわけですね。はじめから単なる事実、歴史家の認識をはなれても存在する事実というものを認めていないわけですね。

**B** そうです。

**A** つまり歴史においては歴史家と事実が別々にあることはないので、歴史の事実というときこの二つの関係は当然のこととして前提しているわけですね。それなら、事実の客観性といつてもそれは歴史家との関係を離れてはないのですから、改めてそれを関係という必要はないでしょう。だからことさらにここに至つて「事実の客観性」と「事実と解釈の関係の客観性」という区別をしてみたところでなんの意味もないではありませんか。真理とは事物と認識の合致だといった哲学者トーマスだつて、それだからといつて真理とは事物と認識者の間の関係の真などとは改めて云いはしなかつた。哲学としてはあたりまえのことですからね。

**B** しかし歴史の場合は一般の認識論の場合とはちがつて対象が過去のものに限られるのですから、認識主体が現在のものだから事実と歴史家の関係は過去と現在の関係という特別の関係をなすのではないのでしょうか。カーも「歴史家と事実の相互作用の不断の作業」といつておきながらすぐいい直してそれは「現在と過去の終りなき対話」だといつています。

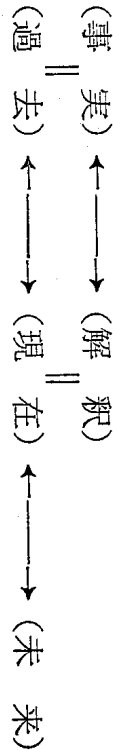
**A** 一応そうはいえます。しかし歴史の事実は過去のものに限られるとはいえず、それを知るのには特別に過去と現在の間

の認識ということではなく、今のこつている遺物とか史料とか記述されたものについて現在知るわけです。そういう物証から事実を推定してゆくしかたは特別に歴史学だけのものではなく、裁判における事実認定なども同じような思考法をつかいます。社会学の実態調査でも同じしかたで事実を確かめます。ただ歴史はそれを過去形に移して述べるわけですが、それにしても考え方としては現在対現在の論理でさしつかえはなく、特別に過去対現在の論理というものはありません。また逆にみれば、どんな科学でも、生物学でも天文学でも地質学でも、みな過去の事がらをその研究の目標として扱っているわけですから、歴史学だけが過去を独占しているというものではありません。

ですからカーが関係の客観性といい直すとき、何かそれ以上に特別につけ加えているものがあるわけではありませんか。

**B** そういえば、はじめは「現在と過去の対話」といつていますがあとでこの本の終り近く「進歩としての歴史」の章で、あれは実は「過去と現在と未来の関係」でしたといひ直しています。つまりその関係項に新たに「未来」を加えたわけです。

**A** そうするとその関係はこうなりますね。



結局この「未来」を入れたのがカーの意図なのであつて、そのために特に「関係」ということを強調したのでしよう。だからこの「未来」が入りこんだ関係を解いてみればこの問題は明らかになると思ひます。

**B** そういえばたしかにカーは歴史の客観性という基本的な問題を第一章の「歴史家と事実」のあとにつづいて論ずればよさそうなものを一番あとになつて「進歩としての歴史」を論ずるところでもち出しているのをみると、やはり客観

性の問題を進歩の問題、つまり未来に関する問題とからみ合わせて考えようとしているようです。私たちが考える場合でも歴史の客観性を論ずるのにやはりこのように「未来」を入れて考えなければいけないのでしょうか。

A 要するにそれがカーの独特な考え方なのです。だが今ここでカーの考え方を分析するよりも一般に歴史の基礎論が一番さきに論ずるしかたを見てみましょう。そうすればおのずからカーの意図がどういうものかはつきりしてきます。よう。

B なるほど。そうすると最もスタンダードな議論はどういうものですか。

A Hempel の The Function of General Laws in History, 1942 とか Gardiner の The Nature of Historical Explanation 1952 とか Popper の The Poverty of Historicism, 1957 というようなものは、その後批判が加えられ、とりわけ Dray の批判以後議論の内容はさらに先に進んではいますが、<sup>(11)</sup>とにかく現代の歴史哲学の古典的位置を占めつつあります。これらのものによつて分析的歴史哲学の一つのフォームができたといつてもいいでしょう。だからそれを見てみましょう。ヘンペルやガーディナーは特別に歴史の客観性という問題は扱っていないのでポッパーの場合をとつてみましょう。

ポッパーはまず最初に「一般化」や「実験」の問題といつしよにこの「客観性」の問題をとりあげています。<sup>(12)</sup>それは要するに観察者と観察対象の間の問題ですが——ポッパーはそれをことさら観察者と観察対象の間の関係などとはいわない——観察者と対象の間にはどうしてもエネルギーの交換がなされてしまうので、予測を不確かにしてしまう。これがいわゆる「不確定性の原理」といわれるもので、そういうことが起るのは観察者も対象もともに物理的世界に属して

いるからで、そのために両者の間に相互作用が起つてしまうからわれわれは完全な客観性というものを得ることができない。このことは物理学においても或る程度あることで、無論物理学においては軽微なので無視してもいい程度ではあるが、それが生物学や心理学になるとだんだん大きくあらわれてくる。社会科学になるとその相互作用は一層顕著になつて、歴史学も一つの社会科学ですから大いにそれがあるわけです。ポッパーは社会科学の場合には主体と客体の間に“a full and complicated interaction”があるといひます。主体が社会的人間であり客体が人間的社会であるから主体はいくら客観的たろうとしても客体の反作用をうけて幾分影響されてしまうわけです。つまりその予測自体が「社会的生起」(a social happening)になつてしまうので、予測を実現させることもできれば邪魔することもできないといふわけで、そこに科学的客観性はいちぢるしく損われてしまう。結局物理学程度の客観性は社会科学ではないに等しいといふわけです。

**B** しかし歴史家には予測や予言ということは関係ないのではないですか。

**A** ポッパーはここでは予測とだけいつていますが、ヘンペル流に解釈すれば、一つの法則に従つて個別的なものを説明する場合、これから生起するものについていつとき「予測」(prediction)といひ、すでに生起したものについていつとき「説明」(explanation)といひ。またウォルシュ流といわないまでも、科学的説明においては prediction と retro-diction は平行するのがたてまえですから、ポッパーのこの三葉を歴史の場合の「説明」といつかえても構わないわけです。

だから歴史学は予測とその実現をもつばら目的とする社会科学ではないにしても、歴史的説明はやはり歴史家の社会的生起としてその歴史家の立つてゐる状況や立場から影響をうけて対象を一樣に見させないといふことが起るわけ



す。つまり歴史的説明においても客観的ということとはなかなか得にくいということです。こういうことは実際の歴史家としても経験するのではないでしょうか。

**B** そういうことはやはり大いにあります。しかし歴史学には物理学のような客観性はないに等しいといえ、結局それぞれ歴史家の見たままがそれぞれ真であるか、歴史的真はないとしかいいようがないではありませんか。

**A** 歴史の客観的真をエポケーして *history* を *story* にしてしまつたり、相対主義に走るならば話はかんたんです。よしんばそれを歴史主義といつてみたところで、科学の領域の外にいくら主義をいい張つてみてもそれは無国籍者の自由でしかなく市民権のない主義ではしようがないでしょう。

ごく基礎的にはポッパーのこの説明で大体いいのですが、勿論これだけでは足りません。ポッパー自身もここから出発して (1) 相対主義を主張する知識社会学と (2) 絶対的真を主張する観念論 (彼はそれを「ユートピア思想」と呼ぶ) の両方を論駁しながら、その中間に、科学的な客観性を見出してゆくのです。そしてそれは結局彼の “*Piece-meal social engineering*” または “*Pragmatic rationalism*” というものにおいて解決するのですが、今ここではポッパーのその独特の考え方の中に踏みこんでゆくよりもつと一般的な議論の道すじにおいてこの問題を追つて行つた方がいいと思ふのです。

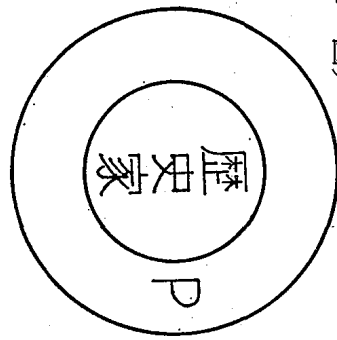
結局今までいつたことは歴史の説明にはどうしても「個人差」が出てしまうということになるのですから、それがどうして出てくるかを分析してみれば、その個人差をちぢめることができるかできないかもわかるわけです。つまりそこで客観的判断ができるかがきまるのです。だからそれはさしずめ “*frame of reference*” の分析をすればいいと思うのです。この前私たちがやつた議論を思い出して下さいませんか。

B たしかにあのときは、ブアードが歴史の判断には選択や解釈が入るので客観的眞は得られないといつていたのに対して、それを論駁しながら、結局歴史の客観性は歴史家と対象の間にある“frame of reference”の中で、その枠組の中で得られるというのでしたね。

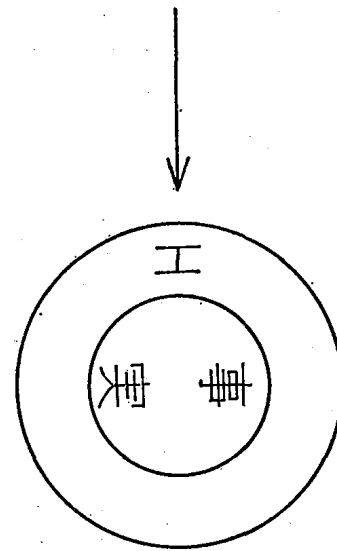
A そうです。ではその frame の構造はどうかというと、歴史家と事実の間にそれぞれ両者をとりまく二つのものがある。即ち(1)歴史家には対象を見るとときその見方をきめさせる「先入見」(prepossession, predilection, personal bias)というものがあり、(2)対象の事実の方にはそれによつて事実が説明される「仮説」または「理論」(explanatory hypothesis, theory) というものがある。今(1)をPとして(2)をHとして対象をOとしてみますと、歴史的説明は  $P \rightarrow H \rightarrow O$  という順序をふんでなされる、こういう歴史の判断を導く一組の原理を“frame of reference”というわけです。

Pの内容は好嫌感情とか利害といったプリミティブなものから人生観、愛国心、社会通念、身分・階級意識、さらには政治的党派心や宗教的信条に至るまで広く歴史家を包んでいる漠然とした判断のよりどころ、漠然とはしているが歴史家に見方をきめさせるかなり強い作用力をもつ一種の原理です。Hの内容は物理的、化学的、生物的、心理的、経済的等々の諸理論、検証された法則です。だから歴史家にOについて妥当なHのどれを選ばせるか、そのさいにPがどう作用するかということで客観的に妥当な説明ができるかどうかきままるわけです。結局この  $P \rightarrow H$  の結びつき方如何がそれを解く鍵になるわけです。

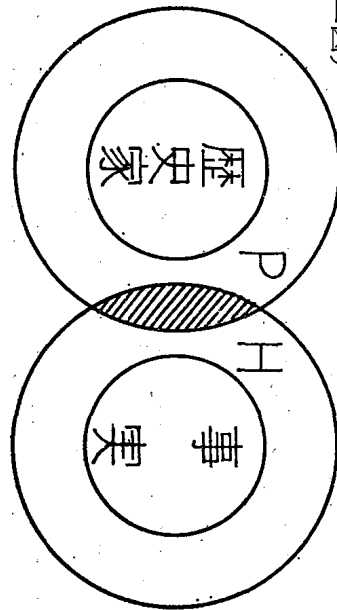
しかし社会科学の常としてこのPとHの関係は微妙に入り組んでいて、もともとは第一図のような関係なのですが、実際には、第二図のような場合が多いのです。大ていの場合歴史的判断はPとHの交錯面でなされます。



(第一図)



(第二図)



**B** このことからその結びつき方について二つの考え方が出てきたわけですね。(1) ピアードのように「どんな歴史の選択も選択する人の精神の中にある frame of reference によつて仮借なく (inexorably) 支配される」という立場と、(2) フックのように P と H は「ゆるく」(loosely) しか結び合わないという二つの立場<sup>(13)</sup> でしたね。

**A** そうです。ピアードの「仮借なく」(inexorably) という言葉は論理的に必然的という意味にとつていいでしょうから、(1) の立場は

$$P_1 \rightarrow H_1 \rightarrow O_1$$

$$P_2 \rightarrow H_2 \rightarrow O_2$$

$$P_3 \rightarrow H_3 \rightarrow O_3$$

ということになります。結局  $P_1$  が  $O_1$  を、 $P_2$  が  $O_2$  を、 $P_3$  が  $O_3$  を描くということになるのでこれは紛れもなく相対主義です。ピアードの立場は明らかにこれです。

**B** 歴史家は一般にこの考え方をとる者が多いですね。またそれは知識社会学の基本的な立場ですから多少そこにニュ

アシスの差はあつても C. Becker も R. Aron も K. Mannheim もこのグループに入ると見ていいですね。

A そうです。次にそれに対して  $P \rightarrow H$  の結びつきを「ゆるく」(loosely) といったフックやガーディナーの (2) の立場は、その結びつきを動機的なものでしかなくて心理的には作用するが論理的には作用しないといった M. White の考え方を容れうるわけで、結局

$$\begin{array}{ccc}
 P_1 \rightarrow H_1 & P_1 \rightarrow H_2 & P_1 \rightarrow H_3 \\
 P_2 \rightarrow H_1 & P_2 \rightarrow H_2 & P_2 \rightarrow H_3 \\
 P_3 \rightarrow H_1 & P_3 \rightarrow H_2 & P_3 \rightarrow H_3
 \end{array}$$

という組みあわせが可能になる。

H と O の結びつきは論理的に必然だから、これは

$$\begin{array}{ccc}
 P_1 \rightarrow H_1 \rightarrow O_1 & P_1 \rightarrow H_2 \rightarrow O_2 & P_1 \rightarrow H_3 \rightarrow O_3 \\
 P_2 \rightarrow H_1 \rightarrow O_1 & P_2 \rightarrow H_2 \rightarrow O_2 & P_2 \rightarrow H_3 \rightarrow O_3 \\
 P_3 \rightarrow H_1 \rightarrow O_1 & P_3 \rightarrow H_2 \rightarrow O_2 & P_3 \rightarrow H_3 \rightarrow O_3
 \end{array}$$

ということになる。だから

$$\begin{array}{ccc}
 P_1 \rightarrow O_1 & P_1 \rightarrow O_2 & P_1 \rightarrow O_3 \\
 P_2 \rightarrow O_1 & P_2 \rightarrow O_2 & P_2 \rightarrow O_3 \\
 P_3 \rightarrow O_1 & P_3 \rightarrow O_2 & P_3 \rightarrow O_3
 \end{array}$$

という場合がありうるので、 $P_1$  と  $P_2$  と  $P_3$  の三者がそれぞれ共通の対象  $O_1$  または  $O_2$  または  $O_3$  を描くことができるわけで

す。だから各歴史家に共通の客観的な説明はできるといふことになるわけです。

**B** 結局この分析の意味は(1)歴史の相対主義・懐疑主義を否定することによつて歴史の一般的客観的眞は得られる、ということと、(2)絶対的な客観主義、あるいは科学神話というようなもの、即ち実証主義歴史家がしばしば陥りがちな史料崇拜というようなものを否定することによつて歴史の眞は歴史家の頭の中にできる、ということをはつきりさせたわけですね。

**A** そうです。歴史家は二つの仕事、即ち

(1) 理性的に自分の先入見(バイアス)を意識しながらそれを修正すること、

(2) 説明にさいして検証された諸科学の法則を導入すること、

この二つによつてそれが達成できるわけです。そしてそれは何か特別すぐれたセンスをもっている歴史家ではなくふつうの歴史家に誰でもできることであつて、それを着実にすれば歴史家は特別な直観主義に傾くこともなく文書の奴隷になることもないわけです。

**B** そうするとカーがさきほど「歴史家は事実の卑屈な奴隷でもなくその暴君的な主人でもない。歴史家と事実の関係は平等な関係、give and takeの関係である」といつたことが完全に合致するわけですね。

**A** そうです。この限りではカーの意見は全面的にうけ入れられると思ひます。カーは一方で(1)「一つの解釈がよければ他の解釈もよいとか、どんな解釈もそれがなされた時と所において眞であるというような相対主義的見方を拒否する」といつており、他方で(2)「われわれのいう基準は昨日も今日もいつまでも変らない或るものという静的な意味での絶対的なものではない。そのような絶対的なものは歴史の本質と両立しない」といつているところを見ると、カ

―が明らかに以上の線に沿った考え方をしているのがよく分ると思えます。

**B** 結局カーは「相対主義」と「絶対的客観主義」(信仰・神話・観念論)の間に正しい道を見出そうとしているわけ  
で、その位置はポッパーと同じレールの上にあるわけですから現在の歴史学はその上を走つて行けばいいわけですね。

**A** そうです。

**B** しかしふつうこのように、歴史の客観性は、どうしても歴史家との関係においてでなければ得られないにしても、  
それを通して事実の客観性を得ようという志向をもっているのですが、なんでカーはことさらに事実の客観性をうち消  
して関係の客観性ということをいうのでしょうか。

**A** ですからカーが特に関係の客観性というとき何と何の関係をいうのかを、今まで出てきた名辞以外の何かを、見  
けてみればいいのです。

**B** 今までの議論には過去と現在の対話というようなことは特別に出てこないのに、カーはことさらにいいかえて更  
にその上に「未来」を加えている点が結局問題になるのですね。

**A** そうです。その「未来」を手がかりにしてカーがそれを客観性とどう結びつけているかを見れば分つてきます。

**B** カーはたしかに「過去を扱う歴史家は未来への理解に向つたとき始めて客観性に近づくことができる」とか、「歴  
史の客観性とは今ここにある確固不動の或る判断基準に基づくのではなく、未来のうちひそんでいて歴史のコースが  
進むにつれて展開してくる基準にのみ基くものである」といつており、非常に強く「未来だけが過去を解釈する鍵をあ  
たえてくれる。この意味においてのみ歴史の究極の客観性ということがいえるのだ」というように、彼は「未来」とい

うものをくりかえしくりかえし強調しています。

**A** そうでしょう。この本の最初にまず事実と解釈の関係は過去と現在の対話だといっておきながら、終り近くあれは実は「過去の事がらと次第に現われてくる未来の目的との間の対話」でしたとわざわざい直しているくらいだから、カーの本心はこのあとの方にあるわけです。だから関係の客観性とは現在を媒介として過去と未来の関係にあるといいたかつたので、そのために声を大きくして関係の客観性ということをいつたのでしよう。しかしこのような「未来」というものが入つてくると今までの議論は大分スジがかわつてきます。

**B** そういう「未来への理解」とか「未来の目的」とかいうものはどういふものですか、私にはよく分かりません。

**A** カーは歴史家に向つて「未来」をどうしろといつていふのですか。

**B** 客観的な歴史家になるためには、「未来」を見なければならぬというのですが、それにはまず「その歴史家が社会と歴史のうちに置かれていゝ自分自身の状況に限定された見方をのりこえる能力をもつこと」を要求し……

**A** それはちやうど私が前にいつた自分のバイアスを意識してバイアスを修正しろといつたことと同じですね。

**B** そうですね。それから次に、「自分の見方を未来に投げ入れて、そうやつて過去に對して、その見方が完全に自身の直接の状況に限定されているような歴史家が到達するよりもつと深いもつと永続的な洞察を得るような能力をもつこと<sup>(19)</sup>」を要求しているのです。

**A** つまり過去と現在だけでなく、現在をとおつてさらに未来にまたがる長期的な見とおしをもつてということですか。

**B** どうもそういうようです。しかしやはり私には自分の見方を「未来に投げ入れて」とか「もつと深いもつと永続的な洞察を」というようなことはよく分かりません。

A それがかゝりの独特な意見なのです。これで見るとどうしてもかゝりは、絶対的な真を最後の客観的な真として、それが今はまだ実現していないがいずれ未来に実現すると考えているのでしよう。

B そうかもしれません。かゝりは「歴史における絶対者」というのは過去にあるものではなく、現在にあるものでもない。それはまだ未完成の生成途上にあるもので、それに向つてわれわれが進んでゆく未来にあるものである。それはわれわれがそれに向つて進んで始めて形をとり始めるようなもの、われわれが前進するにつれて、その光に照らされて、われわれがだんだん過去の解釈を形づくつてゆくようなもの」<sup>(20)</sup>だといつています。

A 未来の光によつて過去の形がきまるといふのはこれは一種の Illumination theory ですね。そういうアプリオリな「未来の光」といふものは直観的に受けとるよりしかたがないでしょう。しかもそれが一番大事なものになつてしまふ。

B かゝりはたしかに、過去の解釈を究極的にきめる基準が未来にあるのだから、それを探り出す「方向感覚」“sense of direction”<sup>(21)</sup>というものを非常に重要視するわけです。実際にこれがあつてこそ歴史家は過去を正しく解釈できるのだといふのです。

A 客観性を解く鍵はどうやらそこにあるようですね。

B 結局そうしますと、未来の絶対的眞に近づいてゆこうとする感覚が過去の客観性を得させるということになると、歴史家は一方で科学的に経験的に分析する能力をもつと同時に他方では未来に対して独特の感覚を働かせていなくてはならないということになるのですが、これはいつたい両立するでしょうか。

A 私は先程の議論のところ、歴史家が客観性を得るのには(1)自分のバイアスを意識しバイアスを修正すること



と(2)諸科学の発達につれてその法則を導入することをあげましたが、(2)の場合の諸科学の発達ということが「未来」に関係してきます。科学の真理というものは変えることがありうるのでいくらヴァリッドな法則だといつても、それは観察者と対象の間に今まで得られたものにすぎないのであつて、今後その法則がくつがえらるということはあつて、それを歴史の進歩というならいつてもよい。ただ歴史家はそれに対してどう対処すればよいのかといえば、法則によつて説明をする歴史家は法則をつくる科学の進歩にただついてゆくだけであつて諸科学の法則を歴史家が先取することはないのです。ノーゲルやホワイトやポッパーがくりかえしているように、歴史家は法則をつかうだけで法則をつくるのではない<sup>(22)</sup>、つまり歴史家は法則の“consumer”であつて“producer”ではない一種の「寄生的」(Parasitic)存在だから、歴史家は理論科学の発達のおかげをこうむるがその発達を推進する力はありません<sup>(23)</sup>。歴史学を一つの科学といつても実際にそれ以上に出ることはないのです。プトレマイオスの天動説が通用していたときは歴史家は天動説に従つて歴史を説明してきた。それがくつがえつてコペルニクスの地動説が正しいとなると今度は地動説に従つて歴史を説明するよりしかたがない。天動説時代に地動説を予見した歴史家があるとすればその人は他の歴史家より客観性に近かつたのでしようが、そういう歴史家はいなかつた。そういうことを少しは考えた人があつたかもしれないが、それは一つの「カン」とか「センス」とかいう漠然とした「仮定」で考えるより他はなかつたでしょう。しかしそういうものは世界観とか自然観とか人生観とかいつて証明されない一つの漠然として仮説にとどまるもので、そういうものを科学の論証の中に入れることはできないのです。カーがとにかくここまで歴史の問題を科学的に論証してきながらいよいよ最後のところで科学的なルールを踏みはずしてしまつたのはどうしたわけでしょう。

**B** 私はその点でカーの考え方は絶対的眞をアプリオリに前提してそれから全歴史のプランを想定したり全歴史のコー

スを導き出したりするようなヨーロッパ思想の中に長い伝統をもつ「歴史形而上学」の考え方と関係があるように思えてなりません。それは近代歴史哲学の中に根深くしみこんでいてどの傾向の流れの中にも底流としてひそんでいる。カントやヘーゲルのような観念論の中にもその反対のコントやコンドルセーのような自然主義の中にも共通のイデオとして流れている。<sup>(24)</sup>カーはそういう伝統的な宗教的な歴史形而上学において歴史が究極的に解決できると考えて、歴史の客観的真という問題もそういうしかたで最終的な答えを出したかったのではないかというような気がするのですが。

A 彼は宗教的な形而上学をふりかざしはしませんが、「これは宗教的神話のうしろにかくれている世俗的真理である」といつているところを見ると、そういうヨーロッパの伝統的思惟の中に身をひそめているということはいえないではないです。しかしそれなら最初の彼の態度、歴史哲学とは特に何か超歴史的な理念を求めているのではなく、ただ「歴史とは何か」について答えるものであるといつて、それを物理学や地質学や心理学などの自然科学と方法、目的、手続きの点でそれほど違つたものではないということ強調し読者を説得してきたそれまでの議論が首尾一貫しないことになりま

す。「伝統的な宗教的神話のうしろにかくれている世俗的真理」とはうまいことをいいますが、この修辭的紛飾には実は歴史哲学にとつて大きな危険が伴います。その宗教的神話に貼りついてはいるために近代歴史哲学と近代歴史学が一つの科学になろうとするのにどれほど苦労したかをカーは本当に知つてはいないのでしよう。ガーディナーがそのために歴史哲学を近代思想史の川底をもぐる“a submarine monster”<sup>(27)</sup>だと呼んだ深刻さをカーはおそらく意識してないのでしよう。カーの器用な手先きでも歴史哲学の一番こんがらかつた糸はどうやら解くことができなかつたようです。

B カーはもともと哲学者ではなく歴史家ですからそういう点のうかつさはあるかもしれませんがね。

A その証拠にずいぶんおかしいことをいうと思つたのはこういうことです。「私がいいたいのは一九二〇年代の歴史家は一八八〇年代の歴史家よりも客観的判断に近いということ、今日の歴史家は一九二〇年代の歴史家よりも近いということ、そして二〇〇〇年の歴史家はもつと近いだろうということである」<sup>(28)</sup>。一八八〇年より一九二〇年、一九二〇年より一九六〇年代の歴史家の方がより客観的になつたということは、そこまでは、われわれは事実<sup>(28)</sup>に徴してどうにか証明することができます。しかしそれだからといって、二〇〇〇年の歴史家が今日の歴史家より客観的になるという保証はありません。そういう推定は信念的<sup>(28)</sup>には出てきても科学的には出てきません。私たちはポッパーがいつた社会科学<sup>(28)</sup>的予見はそれ自体社会的生起だから予見を実現させることも妨げること<sup>(28)</sup>もできないということを忘れてはなりません。人類の歴史が今までもけつして直線的には進歩してこなかつたことはカーもすぐれた歴史家ですから知らないはずはない。一九六〇年代の歴史が二〇〇〇年までの間に確実に客観性を増してゆくということは、大づかみの予想としてはいえても、またそうあることを希望はしますが、科学的な予見としていい切る根拠はない。だから彼が大見得をきつて、過去と未来に対する長期的な見とおしをもつ歴史家がより客観的な歴史家であると断定<sup>(29)</sup>しても、これはおよそ非科学的な言明です。科学的言明はすべて経験的なチェックを受けるものであつて、確実な説明がなされるためには、そのさいの前提になる決定的条件を述べる命題も説明的仮説もともに経験的なテストを受けていなければなりません。それ以上のことは科学的にはいえないのです。だからカーがそういういい方をするのは、絶対的眞があつてそれが未来の歴史の最後に完成するとうきほどの仮定に立つときのみにえるのであつて、そういう絶対的眞をアプリアリに前提するとうことは、信条としては何も妨げませんが、科学的論証の道具につかうことはできません。

B そうすると結局カーは観念論者ですか。

A 表現の上ではたしかに少し観念論的に傾いているようです。そう思われるフシはこの他にもあります。例えば「社会と個人」の関係を扱ったときにも彼は歴史を社会と個人の相関関係においてとらえ、「偉人とは歴史的過程の産物であると同時に歴史をつくる者であり」、「社会的な力のあらわれであると同時にそれをつくり出す者である<sup>(30)</sup>」というのですが、これは彼が個人と歴史、個人と社会の相関関係をいおうとしてのことでしょうが、それは計らずもヘーゲルの英雄論の考え方に似てきます——ランケがそうだったように。或る時代の英雄はその時代の意志を表現し、告げ知らせ、それを実現する人、英雄の行為は彼の時代の本質である、つまり英雄が時代をつくるのだというあの有名なヘーゲルの命題を「今日でもこれ以上のものを知らない<sup>(31)</sup>」と手ばなしでほめているところを見ると、カーは個人と時代の関係を意外にも古いドイツ観念論流で解釈していたことを公言しているわけです。

B 結局カーも一昔前のランケと同じようなヘーゲル礼讃で終るのではなさけないですね。

A しかし私は本当はカーは観念論者ではないと思うのです。彼がもし本当のイデアリストなら始めからこういう発想法はとらないと思います。むしろ彼は彼の好きな「相互作用」“a continuous process of interaction”とか“the reciprocal process of interaction”<sup>(32)</sup>というような言葉をつかつて歴史のさまざまな「二重機能」“the dual function of history”<sup>(32)</sup>を表わしたかっただけで、その思考法をあまり安易につかいますぎたためにこういう問題ではヘーゲルのようになつたのだと思います。イデアリストならもつと弁証法論理をふりまわしたでしょう。歴史の複雑性の上に立つて独断を避けようという気持はわかりますが、もともと表面的な分析でしかない二重機能をやたらに示してみせたところで一時の気休めみたいなもので、問題の核心はけつして解決できるものではない。解決にならないどころか、問題によつてはこの英雄論のように観念論へ横すべりすることすらおこるわけです。

その他にも、事実と歴史家の関係をいい直して「過去と現在の対話」というとき、もう一つ「今日の社会と昨日の社会の対話<sup>(33)</sup>」といい直すのなどもそれほど意味はないと思います。その上、歴史の進歩論のところでは、「歴史の進歩は事実と価値の相互依存、相互作用によつて達成される」のだから「客観的な歴史家とはこの事実と価値の相互過程を最も深く見抜く人のことをいう<sup>(34)</sup>」というに至つては、「相互関係」の濫用のうちに、事実判断の中へ価値判断を織りこんでしまつて客観性の問題をどうもい解けないものにしてしまいます。やはり二重機能方式をかんとんに使いすぎるからそういうことになるのだと思います。

**B** この前の対話のとき論じたピアードが「特殊事実」と「客観的真」を分けて科学的方法を「特殊事実」だけに使えるものとして「客観的真」を得るのには観念論的方法によつた場合と何か似ているような気がしますが、こういうことは歴史家の通弊でしょうか。

**A** そうかもしれません。もともとコリングウッドの“inside fact”と“outside fact”の分類にしても大して意味がないのですがそれと同様で、そういう分け方をして観念論的な思考法を半分とり入れるだけそれだけ科学的な議論を弱くしているという結果になります。

**B** 私も歴史家としては、一九六〇年代より二〇〇〇年代の歴史家の方がより客観的になるといふことは、自信をもつていうことはできませんが、もう一つ、カーが、立憲的・政治史的な歴史観よりも社会的・経済的な見方の方が「より広いより進んだ<sup>(35)</sup>」ものだという意見も承服しかねます。政治史観はたしかに十九世紀の産物ですが、それはそれで歴史の一面をとらえているりつばな一つの歴史観だと思ひます。社会・経済史観は二十世紀に発達したもので新しい歴史の局面を見出すことはできましたが、それだからといつて、政治史観より社会史観の方がより進歩した——カーの考え

方からすればより客観的になつた——とはいえないと思います。この他にも思想史観というものもあるし、それが政治史観と経済史観の両方をつなげる役割もしていますし、またトインビーなどの文明史観というものも出てきて新しい基準とより広い視野で世界史を見直そうとするものもあります。それらは一つ一つ独自の方法によつて歴史の各局面を解明してゆくという意味でみな正しいもので、特に前のものより後のものの方が進歩した、ましてや、より客観的になつたとはいえないと思います。

A その点では私はあなたに賛成できません。第一にカーは十九世紀的な政治史観と二十世紀的な社会史観だけしかいっていないので、この二つは現在までのものであつてしかもその進歩は、この場合客観性へより近づいたということは、ともかく証明することができると思います。今細いことはここで立入つて話す余裕がありませんが、一般的に私の結論だけをいうと、政治史観よりも社会史観の方が歴史の領域において因果関係がより、広くたどられるようになったこと、そしてその因果関係の論理的な確実さもより増したということがいえます。マルクスが政治史観の根底に社会的経済的要因を分析したことはその進歩の土台になつたと思います。あなたのいうように、政治史観も一つの歴史観、社会史観も一つの歴史観という見方こそ相対主義であつて、いくらそれをつみ重ねても真理には到達しません。ですからこの点では私はカーを弁護します。それにカーはそれだからといつてこの社会史観のあとに出てきた文明史観をより進んだものともいわないし結局この問題はそれほどのことではないと思います。

B  
.....  
A だいぶ不服のようですが、これは大きな問題なので改めて論ずることにして、カーが進歩というときかなり大づかみに楽観的に見ているということは私も認めます。

**B** つまり歴史がそれほど直線的に進歩してゆくと思つてゐる点でカーは十八世紀の啓蒙時代の思想家と同じような「進歩信仰」をもつてゐるのでしようか。

**A** 議論の上ではそういうことになるでしょう。

**B** そうなるとわざわざ関係の客観性といつたことによつて歴史の客観性の問題をそれほど進歩させなかつたわけですね。始めは科学的に分析してゆきながらしまひには「方向感覚」や「見通し」できめられるのでは結局歴史学は直観主義・エリート主義になつてしまふではありませんか。

**A** 私は特に「関係の客観性」ということにはいふ必要がないと思つてゐます。反つてカーのいい方は無用の混乱をひき起すだけだと思つてゐます。歴史は最後には事実の客観性を得られなければならないのですが、ただそれが歴史家をとおしてでなければ得られない、だから事実と歴史家の関係は歴史というものにとつて不可欠の条件だから、歴史の事実というだけで歴史家との関係は当然含まれてゐる。そして最後の目標はやはり事実についての客観性を得ることだから、これは歴史家の判断の中にあるからとはいへ、それがただ判断の真というだけではないのではなく、究極的には事実についての真でなければならぬ。だから「事実の客観性」というだけで必要な歴史家との関係を含みながら本来の究極の目標を指している。結局そのいい方一つが一番まちがいがなくていいと思つてゐるのです。

カーがそれを否定してまで「関係の客観性」といつたのは、歴史家と事実の相関関係を強調したかつたことであろうが、それよりも、「未来の洞察」をその中へひき入れたのが一番の目的だろつと思つてゐます。しかしそれによつて彼は「絶対的眞」、「眞の客観性」といふものを *deus ex machina* にもち出して、科学者から予言者に早代りしてしまつ

たのです。

B では結局それは彼の歴史哲学を台無しにしてしまつたわけですね。

A そうではない。彼の理論、科学的に追求していた議論を一貫させなかつたといつていただけです。彼の理論にきれいなフォームが整っていないというだけです。彼が現実を正確に把握しながら、未来に対する進歩の確信と巨視的な見とおしの上に立つて歴史を前向きに見ようとしている姿勢はどちらかという思想家の姿勢です。そしてその限りではりつぱです。その点では私も共鳴を惜しみません。そのことはとりわけカーとは対照的な、科学的・実証的な方法を貫いた、それだけきれいに理論のフォームが整っているポッパーと比べてみればよく分ります。ポッパーはカーのように未来に絶対的客観性があらわれるというようなことはいわず、確実に確実に現在をたしかめて、結局「漸進的社會工学」というものによつて彼の考えをかためている。しかしそれによつて科学的分析の確かさは得られても、そのもつぱら個人的な理性に対する信頼といかにもショート・カットな改良主義が、大きな体制転換に直面する歴史的社会的条件の上ではどこまで使えるか疑問になつてきます。ポッパーの理論が既成の体制の上でのみ通用して結局資本主義・自由主義体制をのり越えて進む歴史の流れの上にはうまくのせられないというのは思想家の判断なのであつて、その点でカーはポッパーに向つて敢然と反対を叫んでいるのです。「ポッパー教授が考えているような理性の地位は、本当はむしろ、現政府の政策を執行する権限をもち、さらにその政策をよりよく働かせるような実際的な改善案を示す権限はもつているが、その政策の根本的な前提や究極の目的を問い訊す権限はもつていないイギリスの役人の地位に似ている。これは有益な仕事ではあるが……そういうふうな理性を現存秩序の前提に従わせるということは私にはどうしても承服できない。……人間的な事からの進歩というものは、それが科学の**た**であれ、歴史の**た**であれ、社会の**た**であれ、既存の体制の中で



漸進的改良を求めただけに終るのではなく、理性の名において現存の体制に向つて、それが依つて立つて、前提に向つて根本的な挑戦をやつてみるという人間の大胆な心構え (the bold readiness of human beings) をとおして出てくるものである<sup>(36)</sup>といつてゐるカーは、さすがに思想家で、ポッパーの理性主義の歴史的社会的限界を見抜いています。そういう彼の進歩的な思想はすぐれていると思ひます。そして悪びれず彼自身オプティミストであるということをおおきしながら、ルイス・ネーミア卿が綱領や理想は避けるようにと私に警告を發するとき、オークション教授がわれわれは特にどこへ行くというのではない、大事なことはボートをゆさぶる人がいないように気を配ることだと私に語るるとき、ポッパー教授が小さな漸進的工学の力であの愛すべき旧式のT式フォードを路上にとめておきたいと願うとき、トレヴァー・ローパー教授がぎやあ〜騒ぎたてる急進派の鼻柱をたたくとき、モリソン教授が健全な保守主義的精神で書かれた歴史の本を弁護するとき、私は揺れ動いてゐる世界、産みの苦しみにある世界を見つめる。そしてあの偉大な科学者の使い古された文句を借りてそれに答える——<sup>(37)</sup>それでも、それは動く<sup>(37)</sup>といつてこの意義ある講演を結んでゐるカー教授に対して私は高い拍手をおくる者の一人です。

カーがうしろ向きにぶつぶついつてゐる歴史家の中にあつてこれほど大胆につくられつつある歴史の尖端に立つて前向きに未来の方向を予感しながらひるがえつて過去をたえず見直してゆこうとするその態度は敬服いたします。

ただ私は、カーがそういう「態度」や「心構え」や「意気込み」“the bold readiness” 或いは「センス」“the pervading sense,” “sense of direction” というような主体的なもの、まだ客体化されなないものを、客体化された「理論」の中に入れるということに反対してゐるだけです。歴史家が真に現在に生きる歴史家なら、彼がその時代に処する態度は、それが前向きであるならばなおさらのこと、自分の理論根拠から相当な「見とおし」がたてられないはず

はないでしょう。さらに歴史の「発見的原理」例えばマルクスの弁証法理論やウェーバー的な理想型のようなものをもつている場合もあるでしょう。最後には自分の実存を決定する「信仰」をもつている場合もあるでしょう。実際にそういうものがなければ歴史家の主体というものはけつしてしつかりした生き生きとしたものにはなつてこないのです。だがそうだからといって、そういう「見とおし」や「発見原理」や「信仰」をすぐ客体化された理論の中へもちこんでいいということはないのです。もどかしいかもしれませんがそれが科学のルールなのです。

B そうするとカーの理論は歴史家の主体的なものと客体的なものを混同していたと見ればいいのですね。

A まあそうですね。それがカー自身の持味ではあるのですが。

B そうするとカーの意図を生かしてその両方を統一するような歴史哲学はないのでしょうか。

A 理論と姿勢（結局は行動）を統一するものとして「思想」というものを私は考えていますが、この「思想としての歴史哲学」ということはまたいろいろな難問を含んでおりますからいずれ機会を改めて議論しましょう。

#### 註

(1) 拙稿「歴史の客観性について——史学者と哲学者の対話」、東京大学哲学会編「哲学雑誌」七六ノ七四七号（一九六一年七月）所載。

(2) Wagner, F., *Moderne Geschichtsschreibung, Ausblick auf eine Philosophie der Geschichtswissenschaft*, Berlin, 1960. この本は新しい歴史哲学の方向を示している。

(3) 私は歴史学を教訓や英雄物語から解放して事実を述べることだけを目的とする学問にしようとした時期、ニーブール・ランケ時代を近代歴史学の第一の啓蒙時代と呼びたい。そしてこんどは、十九世紀末以来の科学と歴史学の二元科学論を打破つて科学の中に歴史学をつくらうとする時期を第二の啓蒙時代と呼ぶ。この仕事は主に第二次大戦後の英・米の哲学者によつてなされている。その論理的分析をどう摂取するかが史学者の課題である。

カーは最初このテーマを一九六一年一月から三月までケンブリッジ大学で連続講演し、そのあと同じ要旨のものを縮めてB Cから放送した。放送原稿は週刊誌の“Listener”に四月二十日号から連載されたが、同年秋、大学で講演した原稿をもととして一冊の本にしたのがこの本で Carr, E. H., *What is History?*, The George Macaulay Trevelyan Lectures delivered in the University of Cambridge January-March 1961. ところが表題をつけている。この成りたちを見つめる。カーがこの問題を大学の中から一般大衆或いは歴史を学ぶすべての学者に向って訴え説得しようとしている啓蒙的意図がよく分る。ポピュラーであるということは、大衆におもねるのではなく大衆を啓発して大衆の中に真理を根づかせようとするときは正しい手段である。それは現代的要請でもある。要は問題意識である。

- (4) Carr, *What is History?*, p. 114.
- (5) *Ibid.*, p. 114.
- (6) *Ibid.*, p. 114.
- (7) *Ibid.*, p. 24.
- (8) *Ibid.*, p. 24.
- (9) この問題については次の二つの論文を参照されたい。  
White, M., *Historical Explanation*, 1943, in Gardiner, P. (ed.), *Theories of History*, Glencoe, 1959.  
Joynt C. B. and Rescher N., *The Problem of Uniqueness in History*, in “*History and Theory*” Vol. I, No. 2, 1961.
- (10) “When, therefore, I spoke of history in an earlier lecture as a dialogue between past and present, I should rather have called it a dialogue between the events of the past and progressively emerging future ends.” Carr, *What is History?*, p. 118.
- (11) Dray, W., *Laws and Explanation in History*, Oxford U. P., 1957.  
Mandelbaum, M., *Historical Explanation: The Problem of ‘Covering Laws’*, in “*History and Theory*”, Vol. I, No. 3, 1961.

Weingartner, R. H., The Quarrel about Historical Explanation, in "Journal of Philosophy", Vol. LVIII, No. 2, 1961. 参照。

- (12) Popper, K. R., The Poverty of Historicism, London, 1957, p. 14~17.
- (13) Beard, Ch., Written History as an Act of Faith, 1934, in Meyerhoff, H. (ed.), The Philosophy of History in Our Time, New York, 1959, p. 150.
- Hook, S., Problems of Terminology in Historical Writing: Illustrations, in Theory and Practice in Historical Study, A Report of the Committee on Historiography, 1946, p. 125.
- (14) White, M., Can History be Objective?, 1949, in Meyerhoff (ed.), *ibid.*, p. 198~199.
- (15) Carr, What is History?, p. 115~116.
- (16) *Ibid.*, p. 118.
- (17) *Ibid.*, p. 124.
- (18) *Ibid.*, p. 117.
- (19) *Ibid.*, p. 117.
- (20) *Ibid.*, p. 115.
- (21) *Ibid.*, p. 116.
- (22) Popper, K. R., The Open Society and Its Enemies, Vol. II, p. 262 f.  
White, Historical Explanation, *ibid.*
- (23) Negel, E., Some Issues in the Logic of Historical Analysis, 1952, in Gardiner (ed.), Theories of History.  
Joint and Rescher, The Problem of Uniqueness in History, *ibid.* 参照。

勿論歴史学は理論科学に対して寄生的だが、歴史家が一つの法則の適用できる boundary condition を追求することによつて、その法則自体のテストをしながらより広い法則を見出してゆくことに貢献することはある。だから科学の発達についてゆくといつても発達に全然寄与しないといふのではない。この問題については稿を改めて述べる。

(24) Löwith, K., *Meaning in History, The Theological Implications of the Philosophy of History*, Chicago, 1949  
参照。

- (25) Carr, *What is History?*, p. 115.
- (26) *Ibid.*, p. 80.
- (27) Gardiner, P., *The Nature of Historical Explanation*, Oxford U. P., 1952.
- (28) Carr, *What is History?*, p. 124.
- (29) *Ibid.*, p. 117~118.
- (30) *Ibid.*, p. 49.
- (31) *Ibid.*, p. 48.
- (32) *Ibid.*, p. 49.
- (33) *Ibid.*, p. 49.
- (34) *Ibid.*, p. 125.
- (35) *Ibid.*, p. 118.
- (36) *Ibid.*, p. 150.
- (37) *Ibid.*, p. 151.